

# 興津弥五右衛門の遺書

森鷗外

青空文庫



それがし  
某儀明日年来の宿望相達し候て、妙解院殿（松向寺殿）

御墓前において首尾よく切腹いたし候事と相成り候。しかれば子

孫のため事の顛末書き残しおきたく、京都なる弟又次郎宅にお

いて筆を取り候。

それがちふ  
某祖父は興津右兵衛景通と申候。永正十一（十七）年駿

るがのくにおきつ  
河国興津に生れ、今川治部大輔殿に仕え、同国清見が関に住居

いたし候。永禄三年五月二十日今川殿陣亡遊ばされ候時、景

げみち  
通も御供いたし候。年齢四十一歳に候。法名は千山宗及

ゆうこじ  
居士と申候。

さいはち  
父才八は永禄元年出生候て、三歳にして怙を失い、母の手に

養育いたされ候て人と成り候。壮年に及びて弥五右衛門景一と名な  
 告り、母の族なる播磨国はりまのくにの人佐野官十郎方さのかんじゅうろうに寄居いたしおり  
 候。さてその縁故をもつて赤松左兵衛督あかまつさひょうえのかみ殿に仕え、天正てんしょう  
 九年千石を給わり候。十三年四月赤松殿阿波国あわのくにを併せ領せられ  
 候に及びて、景一かげかずは三百石を加増せられ、阿波郡代あわぐんだいとなり、同  
 国渭津いのつに住居いたし、慶長けいちようの初まで勤続いたし候そろ。慶長五年  
 七月赤松殿石田三成いしだかずしげに荷担かたんいたされ、丹波国たんばのくになる小野木縫殿  
 介すけとともに丹後国たんごのくに田辺城たなべのしろを攻められ候。当時田辺城には松  
 向寺殿こうじ三斎さんさい忠興公ただおきこう御立籠り遊ばされおり候そろところ、神君  
 上杉景勝うえすぎかげかつを討たせ給うにより、三斎公も随従遊ばされ、跡あとに  
 は泰勝院殿たいしょういんでん幽斎ゆうさい藤孝公ふじたか御留守遊ばされ候。景一は京都赤

松殿やしき邸にありし時、烏丸光広卿と相識そうしきに相成りおり候そろ。こ  
 れは光広卿が幽齋公和歌の御弟子にて、嫡子ちやくし光賢卿みつかたに松向寺  
 殿の御息女万姫君まんひめぎみを妻めあわせ居られ候故そふゆえに候。さて景一光広卿を介かい  
 して御当家御父子とも御心安く相成りおり候。田辺攻たなべせめの時、関  
 東おんいでに御出遊でばされ候三齋公は、景一が外がいせき戚せきの従弟たる森三右  
 衛門を使に田辺へ差立てられ候。森は田辺ちやくに着いたし、景一に面  
 会おんむねして御旨むねを伝え、景一はまた赤松家の物頭ものがしら井門い亀右衛門かどかめえもん  
 と謀はかり、田辺城みょうあんまるの妙庵みやうあん丸まる櫓やぐらへ矢文やぶみを射掛やけ候。翌朝景一は  
 森を斥候やの中に交やせて陣所を出だし遣り候。森は首尾よく城内に  
 入り、幽齋公の御親書を得て、翌晚関東へ出立ふぜんのくにいたし候。この歳とし  
 赤松家滅亡せられ候により、景一は森の案内にて豊前国ふぜんのくにへ参り、

慶長六年御当家に召抱めしかかえられ候そろ。元和五年御当代光みつひさ尚公御誕生遊ばされ、御幼名六丸君ろくまるぎみと申候。景一は六丸君御附おつきと相成り候。元和七年三齋公御致仕遊ばされ候時、景一も剃髮ていはついたし、宗也そうやと名告なのり候。寛永九年十二月九日御先代みようげいんでんだとし妙解院殿忠利こうひご公肥後へ御入国遊ばされ候時、景一も御供おんともいたし候。十八年三月十七日に妙解院殿卒去遊ばされ、次いで九月二日景一も病死いたし候。享年きょうねん八十四歳に候。

兄九郎兵衛一友かずともは景一が嫡子にして、父につきて豊前ぶぜんへ参り、慶長十七年三齋公に召しおんつきづとめいだされ、御次勤おんつきづとめ仰つけられ、後病

気により外様勤とぎまづとめと相成り候。妙解院殿の御代おんだいに至り、寛永十四年冬島原攻しまばらげめの御供いたし、翌十五年二月二十七日兼田弥一かねたやいち右

衛門えもんとともに、御当家攻せめくち口の一番乗と名告り、海に臨める城壁の上にて陣亡いたし候。法名をぎしんえいりゆうこじ義心英立居士もうせろと申候。

それがしぶんろく某は文禄四(三)年景一が二男に生れ、幼名才助と申候。七

歳の時父につきて豊前国小倉へ参り、慶長十七年十九歳にて三齋公に召しひだされ候。元和七年三齋公致仕遊ばされ候時、父も剃髪そうちいたし候えば、某二十八歳にて弥五右衛門景吉やごえもんかげよしと名告り、三齋公の御供いたし候て、豊前国興津に参り候。

寛永元年五月安南船あんなんせん長崎に到着候時、三齋公は御薙髪遊ごていはつばされ候てより三年目なりしが、御茶事おんちやしに御用おんもちいなされ候珍らしき品買おおせい求め候様仰含あいやくめられ、相役横田清兵衛きやらと兩人にて、長崎へ出向き候。幸なる事には異なる伽羅きやらの大木渡来いたしおり

候。しか然るところその伽羅もとぎに本木うらぎと末木との二つありて、はるばる  
 仙台より差さしくだ下され候 伊達権中納言だてごんちゆうなごん 殿の役人ぜひと本木の方  
 を取らんとし、某も同じ本木に望を掛け互にせり合い、次第に値  
 段をつけ上げ候。あ

その時横田申候は、たとい主命なりとも、香木こうぼくは無用の翫がんぶ  
 物つに有これあり之、過分の大金なげうを擲そることち候事は、不可しかるべからず然、所詮しよせん本木

を伊達家に譲り、末木を買求めたき由よし申候。それがし 某申候は、某は左様  
 には存じ申さず、主君の申つけられ候は、珍らしき品を買い求め  
 参れとの事なるに、このたび渡来候品そらの中にて、第一の珍物はか  
 の伽羅かに有之、その木に本末あれば、本木の方が尤物ゆうぶつ中の尤物  
 たること勿論もちろんなり、それを手に入れてこそ主命を果すに当るべ

けれ、伊達家の伊達を増長致させ、本木を譲り候ては、細川家の  
ながれけが流を流す事と相成り申すべくと申候。横田嘲笑あざわらいて、それは力  
からこぶ瘤の入れどころが相違せり、一国一城を取るか遣るかやと申す  
 場合ならば、飽くまで伊達家に楯をつくがよろしからん、高が四  
 畳半の炉にくべらるる木の切れならずや、それに大金を棄てんこ  
 と存じも寄らず、主君御自身にてせり合われ候そうらば、臣下として  
いさごとど諫め止め申すべき儀なり、たとい主君がしいて本木を手に入れた  
おぼしめく思召されんとも、それを遂げさせ申す事、阿諛便佞あゆべんねいの所為しよゐな  
 るべしと申候。当時三十一歳の某それがし、この詞を聞きことばて立腹致し候え  
 ども、なお忍んで申候は、それはいかにも賢人らしき申もうしじよう 条な  
 り、さりながら某はただ主命もうぢのと申物が大切なるにて、主君あの城

を落せと仰せられ候わば、鉄壁なりとも乗り取り申すべく、あの  
 首を取れと仰せられ候わば、鬼神なりとも討ち果たし申すべくと  
 同じく、珍らしき品を求め参れと仰せられ候えば、この上なき名  
 物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格  
 別、その事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候。横田  
 いよいよ嘲笑あざわらいて、お手前とてもその通り道に悖りたる事はせ  
 ぬと申さるるにあらずや、これが武具などならば、大金に代かうと  
 も惜しからじ、香木に不相応なる価あたいをいださんとせらるるは若じやく  
 輩はいの心得ちがいなりと申候。某申候は、武具と香木との相違は  
 某若輩ながら心得居る、泰勝院殿たいしょういんでんの御代おんだいに、蒲生殿がもう申され  
 候そろうは、細川家には結構なる御道具あまた有これあま之由なれば拜見まかりに罷

出いずべしとの事なり、さて約束せられし当日に相成り、蒲生殿  
 参そられ候に、泰勝院殿は 甲か 冑つちゆう 刀劍弓鎗ゆゑりの類を陳つらねて御見せな  
 され、蒲生殿意外おほに思おほされながら、一応御覽あり、さて実は茶器  
 拝見致したく参上したる次第なりと申され、泰勝院殿御笑いなさ  
 れ、先きには道具おほと仰おほせられ候故、武家の表道具を御覽に入れた  
 り、茶器ならば、それも少々持合せ候とて、はじめおんとて御取いだり出いし  
 なされし由、御当家におかせられては、代々武道の御心掛深くお  
 わしまし、かたがた歌道茶事までも堪たんのう能のうに渡らせらるるが、天  
 下に比類なき所ならずや、茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家  
 の大礼、先祖さいしの祭祀さいしも総すべて虚礼なるべし、我等われらこの度たび仰たを受けた  
 るは茶事に御用に立つべき珍らしき品を求むる外ほか他事なし、これ

が主命なれば、身命に懸かけても果さずでは相成らず、貴殿が香木に大金を出す事不相応なりと思され候ころは、その道の御心得なき故ゆえ、一徹に左様思わるるならんと申候。横田聞きも果てず、いかにも某は茶事の心得なし、一徹なる武ぶ辺者へんものなり、諸芸に堪能なるお手前の表芸が見たしと申すや否や、つと立ち上がり、脇わき差ざしを抜きて投げつけ候。某は身をかわして避よけ、刀は違ちがいいだななの下のなる刀掛に掛けありし故、飛びしざりて刀を取り抜き合せ、ただ一打に横田を討ち果たし候。

かくて某は即時きやうに伽羅の本木を買い取り、仲津なかつへ持ち帰り候。伊達家の役人は是非ぜひなく末木を買い取り、仙台へ持ち帰り候。某は香木を三齋公に参らせ、さて御願ひ申候は、主命大切と心得候

ためとは申ながら、御おんやく役に立つべき侍一人討ち果たし候段、恐  
 れ入り候えば、切腹仰おおせつ附つけられたくと申候。三齋公きこしめ聞き召めされ、  
 某たれに仰せられ候はその方が申条一々もつとも至極しごくせり、たとい香  
 木とうとは貴たかからずとも、この方が求もとめ参まれと申しつけたる珍ちん品びんに相  
 違ちがなければ大切と心得候事当然なり、総て功利の念を以もつて物を視み  
 候そうらわば、世の中に尊とうとき物は無くなるべし、ましてやその方が持ち  
 帰り候伽羅は早速た焚たき試たみ候に、希代きたいの名木なれば「聞く度に珍  
 らしければ郭ほととぎす公こういつも初音はつねの心地こころちこそすれ」と申す古歌もとに本  
 づき、銘を初音とつけたり、かほどの品を求め帰り候事天あつぱれ晴はな  
 り、ただし討うたれ候横田清兵衛が子孫遺恨いこんを含ふくみいては相成らず  
 と仰せられ候。かくて直ちに清兵衛が嫡子を召され、御前におい

て盃さかずきを申付けられ、某は彼者かのものと互に意趣を存ずまじき旨誓言むねせいごんいたし候。しかるに横田家の者どもとかく異志を存する由相聞え、ついに筑前国ちくぜんのかくにへ罷越まかりこし候。某へは三齋公御名忠興ただおきの興おきの字を賜たまわり、沖津を興津と相改め候様御沙汰有そらようござた之候。

これより二年目、寛永三年九月六日主上むいかしゆじよう二条の御城おんしろへ行

幸遊きゆうゆうばされ妙解院殿へかの名香を御所望有これあり之すなわちこれを献けん

ぜらるる、主上えいかん叡感えいかん有りて「たぐひありと誰たれかはいはむ末すゑ勻はふ

秋より後のしら菊の花」と申す古歌の心にて、白菊なづと名附なづけさせ

給由承たまひり候。某が買い求め候香木かしこ、畏かしこくも至尊の御賞美こうむを被こうむり、

御当家の誉ほまれと相成り候事、存じ寄らざる儀ぎと存じ、落涙候事に候。

その後某は御先代妙解院殿よりも出格の御引立こうむを蒙り、寛永九

年御国替おんくにがえの砌みぎりには、三齋公の御居城やつしろ八代やつしろに相詰あいつめ候事と相成  
 り、あまつさえ殿御上京の御供めしぐにさえ召具めしぐせられ候そろ。しかるとこ  
 ろ寛永一四年島原征伐の事有これあり之候。某をば妙解院殿御弟君中なかつ  
 務少かさしょうゆうどの輔殿立孝公たつたかこうの御旗本おんはたもとに加おんえられ御おんのぼり幟おんを御預おんけ  
 なされ候。十五年二月廿二日御当家御攻口おんせめくちにて、御幟おんを一番に  
 入れ候時、銃丸左ももの股あたに中あり、ようよう引き取り候。その時某四  
 十五歳てきずへいゆに候。手創平癒候てきずへいゆて後、某は十六年に江戸詰仰えどづめつけられ候そろ。  
 寛永十八年妙解院殿存じ寄らざる御病さきだち氣にて、御父上さきだちに先立、  
 御卒去遊ひこのかみどのばされ、当代肥後守殿光尚みつひさ公の御代みよと相成みより候。同  
 年九月二日には父弥五右衛門景一死去みよいたし候。次いで正保しょうほう  
 二年三齋公も御卒去遊さばされ候。これより先さき寛永十三年には、

同じ香木の本末を分けて珍重なされ候仙台中納言殿さえ、わかばや少

林しじょう城じょうにおいて御ご薨こう去きよなされ候そろ。かの末木の香は「世の中の

憂うれきを身に積しほむ柴ふね舟ふねやたかぬ先よりこがれ行ゆくらん」と申す歌の

心にて、柴舟と銘し、御珍蔵なされ候由に候。

それがし某それがしつらつら先考御当家につかえたてまつりそろ奉仕候てより以来の事を思う

に、父兄ことごとく出格の御引立こうむを蒙りしは言うも更さらなり、某一

身に取りては、長崎において相役横田清兵衛を討ち果たし候時、

松向寺殿一命を御救助下され、この再さいぞう造の大恩ある主君御卒去

遊ばされ候に、某いかでか存命いたさるべきと決心いたし候。

先年妙解院殿御卒去みぎりの砌には、十九人の者ども殉じゆん死しんいたし、

また一昨年松向寺殿御卒去の砌にも、みのたへいしちまさもと簗田平七正元、おのでん小野伝

べえともつぐ、兵衛友次、くのよえもんむねなお、ほうせんいんしょうえんぎようじゃ  
 久野与右衛門宗直、宝泉院勝延行者の四人直  
 ちに殉死いたし候。簗田は曾祖父和泉と申す者相良遠江守さからとおとうみのかみ  
 殿の家老にて、主とともに陣亡し、祖父若狭、父牛之助流浪せしるろう  
 に、平七は三斎公に五百石にて召し出されしものに候。平七は二いだ  
 十三歳にて切腹し、小姓磯部長五郎介錯いたし候。小野はこしょう  
 丹後国にて祖父今安太郎左衛門の代に召し出されしものなるが、いまやすたるざえもん  
 父田中甚左衛門御旨に忤い、江戸御邸より逐電したる時、御じんざえもんおんむね  
 近習を勤めいたる伝兵衛に、父を尋ね出して参れ、もし尋ね出きんじゆ  
 さずして帰り候わば、父の代りに処刑いたすべしと仰せられ、伝おほ  
 兵衛諸国を遍歴せしに廻り合わざる趣にて罷り帰り候。三斎公そまか  
 の時死罪を顧みずして帰参候は殊勝なりと仰せられ候て、助命遊

ばされ候。伝兵衛はこの恩義を思候て、切腹いたし候。介錯かいしやく

は磯田いそだ十郎に候。久野は丹後の国において幽齋公に召し出され、

田辺御籠城べのこうじょうの時功ありて、新知百五十石賜たまわり候者に候。矢野

又三郎介錯いたし候。宝泉院は陣貝吹じんがいふきの山伏やまぶしにて、筒井つついじゆん

順慶けいの弟石井備後守吉村が子そに候。介錯は入魂じつこんの山伏の

由に候。

某それがしはこれ等らの事を見聞候につけ、いかにも羨うらやましく技癢ぎように堪たえ

ず候そえども、江戸詰御留守居の御用残りおり、他人には始末相成

りがたく、空むなしく月日の立つに任せ候。然しかるところ松向寺殿御遺ごい

骸がいは八代なる泰勝院にて茶だびせられしに、御遺言ごゆいごんにより、去年

正月十一日泰勝院專誉御遺骨ごゆいこつを京都へ護送いたし候。御供には

ながおかかわちかけのり  
 長岡河内景則、加来作左衛門家次、山田三右衛門、佐方源さかたげんぎ  
えもんひでのぶ 左衛門秀信、吉田兼庵相立ち候。二十四日には一同京都に着  
むらさきのだいとくじ し、紫野大徳寺中高桐院に御納骨いたし候。御生前におい  
せいがんおしょう て同寺清巖和尚に御約束有之候趣に候。これあり  
 さて今年御用相片づき候えば、御当代に宿望言上いたし候そろに、  
や 已みがたき某が志を御聞届け遊ばされ候そろ。十月二十九日朝御暇おんいと  
まごい 乞まごいに参り、御振舞おんふるまいに預り、御手おんてずから御茶を下され、引出ひきでも  
の 物として九曜もんの紋赤裏ふたかさねの小袖ふたかさね二襲たまたを賜たまわり候。退出候後、  
はやしげき 林外記殿、藤崎作左衛門殿を御使として遣つかわされ後々の事心配いた致  
むねお すまじき旨仰むねおせられ、御歌を下され、又京都へ参らば、万事古橋  
ねんごろ 小左衛門と相談して執り行ねんごろえと懇ねんごろに仰ねんごろせられ候。その外堀田加ほったかがの

賀守かみ殿、稲葉能登守いなばのとのかみ殿も御歌おんうたを下され候。十一月二日江戸出立の時は、御当代の御使として田中左兵衛殿品川まで見送られ候。

当地ちやぞろに着候てよりは、当家の主人たる弟又次郎の世話に相成り候。ついでには某相果て候後、短刀を記念かたみに遣しつかわ候。

饑別せんべつとして詩歌しいかを贈られ候人々は、烏丸大納言資慶からすまるだいなごんすけよし卿、裏松宰相うらまつさいしやうすけよし資清卿、大徳寺清巖和尚、南禅寺、妙心寺、天竜寺、相国寺、建仁寺、東福寺並びならに南都興福寺の長老達ちやうらに候。

明日切腹候場所は、古橋殿取計とりはからいにて、船岡山ふなおかやまの下に仮屋

を建て、大徳寺門前より仮屋まで十八町の間、藁筵わらむしろ三千八百枚余を敷き詰め、仮屋の内には畳一枚を敷き、上に白布おほを覆こい有

れありそるよし

之候由に候。いかにも晴がましく候て、心苦しう候えども、こ

れまた主命なれば是非なく候。立会たちあいは御当代の御名代ごみょうだい谷内蔵

のすけ

之允殿、御家老長岡与八郎殿、同半左衛門殿にて、大徳寺清巖実

りんじよう

堂和尚も臨場りんじようせられ候。倅才せがれ右衛門も参るべく候。介錯はか

のみいちろべえかつよし

ねて乃美市郎兵衛勝嘉殿に頼みおき候。

ほうみよう

某法名は孤峰こほう不白ふはくと自選そろいたし候。身不肖ふしようながら見苦し

き最期も致すまじく存じおり候。

あて

この遺書は倅才右衛門宛あてにいたしおき候えば、子々孫々あいつた相伝

たいしたてまつり

え、某が志を継ぎ、御当家に奉た対たい、忠誠ぬぎんを擢たずべく候。

しょうほう

正保四年丁亥十二月朔日さくじつ

興津弥五右衛門景吉華押かおう

## 興津才右衛門殿

正保四年十二月二日、興津弥五右衛門景吉は高桐院こうとういんの墓もつに詣もつでて、船岡山ふなおかやまの麓ふもとに建てられた飯屋に入つた。畳の上に進んで、手に短刀を取つた。背後うしろに立つている乃美市郎兵衛のみの方を振り向いて、「頼むうなじ」と声を掛けた。白無垢しろむくの上から腹を三文字に切つた。乃美は項うなじを一刀切つたが、少し切り足りなかつた。弥五右衛門は「喉のど笛ぶえを刺されい」と云つた。しかし乃美が再び手を下さぬ間に、弥五右衛門は絶息した。

飯屋の周囲には京都の老若男女が堵との如ごとくに集つて見物した。落首の中に「比類なき名をば雲井に揚げおきつやごゑを掛けて追お

ひばら  
腹を切る」と云うのがあった。

興津家の系図は大略左の通りである。

弥五右衛門景吉かげよしの嫡子ちやくし才右衛門一貞かずさだは知行二百石を給たまわ  
つて、鉄砲三十挺ちようがしら頭うまで勤めたが、宝永元年に病死した。右  
ひょうえかげみち  
兵衛景通ひょうえかげみちから四代目である。五世弥五右衛門は鉄砲十挺頭まで  
勤めて、元文げんぶん四年に病死した。六世弥忠太は番方ばんかたを勤め、宝  
暦うれき六年に致仕ちしした。七世九郎次は番方を勤め、安永五年に致仕  
した。八世九郎兵衛は養子で、番方を勤め、文化元年に病死した。

九世榮喜えいきは養子で、番方を勤め、文政九年に病死した。十世弥忠太は榮喜の嫡子で、後才右衛門と改名し、番方を勤め、万延元まんえん年に病死した。十一世弥五右衛門は才右衛門の二男で、後宗也そうやと改名し、犬追物いぬおうものが上手じょうずであつた。明治三年に番士にせられていた。

弥五右衛門景吉の父景一かげかずには男子が六人あつて、長男が九郎兵衛一友かずともで、二男が景吉であつた。三男半三郎は後作太夫景かげゆき行と名告なほつていたが、慶安五年に病死した。その子弥五太夫が

寛文十一年に病死して家が絶えた。景一の四男忠太は後四郎右衛門景時と名告つた。元和元年大阪夏の陣に、三斎公に従つて武功を立てたが、行賞の時思ふ旨があると云つて辞退したので追放せ

○右兵衛景通  
— 門景一  
— 弥五右衛

九郎兵衛一友

○弥五右衛門景吉—才右衛門一貞

作太夫景行—弥五太夫

四郎右衛門景時—四郎兵衛

八助、後宗春

又次郎—市郎左衛門

作右衛門—登—四郎右衛門—宇平太—順次—熊喜—登

弥五右衛門—弥忠太—九郎次—九郎兵衛—栄喜

才右衛門—弥五右衛門

られた。それから寺本氏に改めて、伊勢国いせのくに亀山かめやまに往つて、本  
んだしもうさのかみとしつぐ  
 多下たげ総守俊次に仕えた。次いで坂下さかのした、関、亀山三箇所  
ぶぎよう  
 の奉行にせられた。寛政（永）十四年の冬、島原の乱に西国の  
 諸侯が江戸から急いで帰る時、細川越中守綱利えちちゆうのかみつなとしと黒田右  
んのすけみつゆき  
 衛門佐光之さみつゆきとが同日に江戸を立つた。東海道に掛かると、人  
 馬が不足した。光之は一日だけ先へ乗り越した。この時寺本四郎  
 右衛門が京都にいる弟又次郎の金を七百両借りて、坂下、関、亀  
 山三箇所の人馬を買い締めて、山の中に隠して置いた。さて綱利  
 の到着するのを待ち受けて、その人馬を出したので、綱利は土山  
 水口の駅で光之を乗り越した。綱利は喜んで、後に江戸にいた四  
 郎右衛門の二男四郎兵衛を召し抱めえたかか。四郎兵衛の嫡子作右衛門

は五人扶持にんぷち二十石を給わつて、中小姓ちゅうこうしやう組に加わつて、元禄四年に病死した。作右衛門の子登のぼるは越中守宣紀のぶのりに任用せられ、役料共七百石を給わつて、越中守宗孝むねたかの代に用人を勤めていたが、元文三年に致仕した。登の子四郎右衛門は物奉行ものぶぎやうを勤めているうちに、寛延三年に旨に忤さかつて知行宅地を没収せられた。その子宇平太うへいたは始め越中守重賢しげかたの給仕を勤め、後に中務大輔治年なかつかさたいふはるとしの近習きんじゆになつて、擬作ぎさく高百五十石を給わつた。次いで物頭ものがし列られつにせられて紀姫附つなひめになつた。文化二年に致仕した。宇平太の嫡子順次は軍学、射術に長じていたが、文化五年に病死した。順次の養子熊喜くまきは実は山野勘左衛門の三男で、合力米ごうりきまい二十石を給わり、中小姓を勤め、天保八年に病死した。熊喜の嫡子衛一郎

は後四郎右衛門と改名し、玉名郡代を勤め、物頭ものがしら列られつにせられ  
 た。明治三年に鞫獄きくごく大属だいぞくになつて、名を登と改めた。景一の  
 五男八助は三歳の時足を傷きずつて行歩ぎようほ不自由になつた。宗春むねはると  
 改名して寛文十二年に病死した。景一の六男又次郎は京都に住ん  
 でいて、播磨国はりまのくにの佐野官十郎の孫市郎左衛門を養子にした。

# 青空文庫情報

底本：「カラー版日本文学全集」 森鷗外「河出書房新社

1969（昭和44）年3月30日初版発行

初出：「中央公論」

1912（大正元）年10月

※人名の修正箇所は、「山椒大夫・高瀬舟・阿部一族」（角川文庫、1967）を参照しました。

入力：土屋隆

校正：川山隆

2008年3月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 興津弥五右衛門の遺書

森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>